金沢市広坂遺跡の発掘調査－中世編－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2994

金沢市広坂遺跡の発掘調査

－中世編－

庄田知充（金沢市埋蔵文化財センター）

はじめに

金沢市は、平成９～13年度の５ヶ年をかけて、金沢21世紀美術館建設予定地において、広坂遺跡の発掘調査を実施した。平成15年度からは、発掘調査報告書を順次刊行している。今回の発表では、平成16年度に刊行した第２分冊（古代・中世編）としてまとめた発掘調査の成果のうち、中世期の遺物・遺構について概説する。

広坂遺跡と周辺の地理的・歴史的環境

広坂遺跡の所在する石川県金沢市広坂１丁目地内（Figure1-①）は、地勢学的には、市域を二分して流れる犀川と浅野川の間を北西に延びる笠舞上位段丘の縁辺部に位置する。この段丘は、7～10万年前（更新世後期末～末期）に河川の堆積で形成された地形で、この上位に広がる小立野段丘末端部には、金沢城や兼六園が立地する。

広坂遺跡のすぐ北側には、平山城である金沢城（②）がある。金沢城石川門土橋（③）および車橋門（④）の発掘調査では、市内では唯一の資料となる後期旧石器時代の頁岩製剥片石器が出土している。笠舞Ａ遺跡では、縄文時代中期に広場を中心とした60棟以上もの大集落が営まれていた。大手町遺跡（⑤）では、縄文時代後期の陥し穴状遺構が多数検出されている。縄文時代晩期の笠舞Ｂ遺跡では、大量の骨製釣針が出土した。そのほか金沢城周辺の複数の城下町遺跡の調査において、縄文時代後・晩期の遺物が採集されている。広坂遺跡でも、縄文時代晩期の深鉢と磨製石斧が出土している。弥生時代の広坂遺跡は、中期後半から遺跡が始まり、後期後半から終末期にかけて土器量でピークをむかえる。後期後半～終末期に掛けての遺跡は、大手町遺跡、高岡町遺跡（⑥）など城下町遺跡の下層遺構として多数確認されている。小立野丘陵上などには、古墳が立地していたことが、江戸時代の記録などから推測されるが、早くから市街化が進んでいたために、実体が不明である。移転前の金沢大学工学部の敷地内に位置する崎浦御塚遺跡には古墳があったという伝承が残る。集落遺跡では、高岡町遺跡で古墳時代前期の竪穴建物が確認され、広坂遺跡の南に位置する下本多町遺跡（⑦）では、古墳時代中期の土器が出土している。古墳時代の広坂遺跡は、前期から後期にかけて、遺物量は少ないものの遺跡が継続している。玉製品（車輪石・勾玉）、玉原石（Figure.2）が出土しており、玉つくり集落があった可能性が高い。

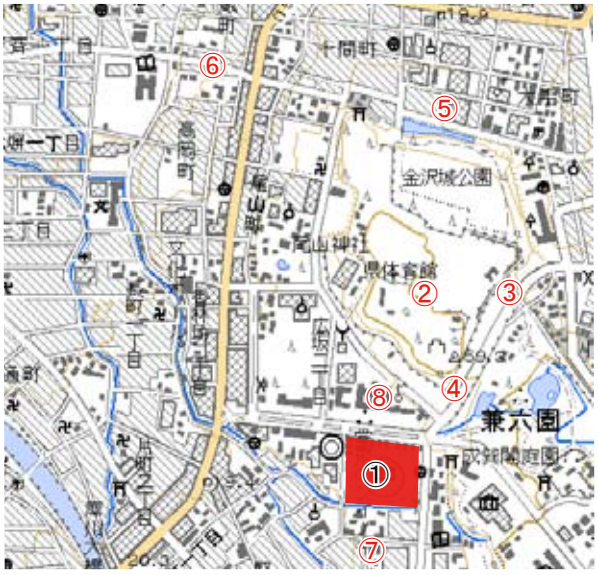


Figure.1　広坂遺跡の位置


Figure.2　縄文～古墳時代の石製品

飛鳥時代では、高岡町遺跡で竪穴建物が３棟、渡来系の半瓦当を含む古式瓦や、奈良三彩、銅製帯金具が見つかっている。遺物の特殊性から、一般的な集落とは異なる性格の遺跡として考えられている。広坂遺跡では、平城宮式、藤原宮式に準拠した末窯や観法寺窯など地元産の大量の瓦（Figure.3）や、「佛」刻書土器、「寺」刻書平瓦、仏器などが出土し、矩形の区画溝や掘立柱建物、竪穴建物などを検出した。奈良時代以降に本格的な伽藍配置をもつ古代寺院が造営されたと考えられる。また、大手町遺跡や、広坂遺跡のすぐ北側

に位置する旧県庁跡地（⑧）、金沢城内など、市街地中心部の各所で古代の遺構・遺物が確認されている。

中世では、高岡町遺跡で薬研堀状の溝、広坂遺跡で矩形の敷地を呈する複数の区画溝が検出され、市街地中心部における鎌倉・室町期の館跡の展開が想定される。戦国期では、広坂遺跡で石組を伴う方形土坑や、礎石建物が確認されている。一向宗に支配されていた金沢では、天文 15 年（1546）に、のちの金沢城となる小立野台地先端部に本願寺支坊である金沢御堂（みどう）が造営された。戦国期の遺構は、金沢御堂の寺内町に関連する遺構であろう。

金沢御堂は、天正 8 年（1583）の佐久間盛政の攻撃により陥落、盛政は御堂跡に居城をおいた。次いで天正 11 年には、盛政に替わって前田利家が金沢城にはいり、本格的な城下町整備を始めた。初期の城下町は重臣を城内に配置する内山下の形をとり、武士団と尾張などから招聘した商人を城の周囲に集住させた。徳川政権との関係悪化を背景に、慶長 4 年（1599）



Figure.3　奈良時代の瓦



Figure.4　広坂遺跡遠景　南西から（平成 4 年撮影）

には内惣構（そうがまえ）、同 15 年には外惣構を築いて城の守りを固めた。元和年間（1615 ～ 1624）を中心に、城の背後である小立野と、北国街道の城下への出入口である卯辰山（うたつやま）山麓および、野町・寺町に寺院群をあつめたのも戦略的意図があったとされる。増加する城下の人口に対応するため、元和元年（1615）からは、浅野川および犀川河原を整備して町立てした。寛永 8 年(1631)と同 12 年の 2 度にわたる大火により、金沢の城下は大半を焼失、これを契機に街区が大幅に改正された。城内にいた重臣は城の近辺と城下町の要所に配置され、町地は街道沿いを中心に移動させた。城下町の基幹的な構造は、このときに完成したと考えられ、宝暦 9 年（1759）に再び城下は大火に見舞われるものの、街路や町割などの大きな変更は、藩政末まで行われなかった。平成 17 年度までに実施された城下町跡の発掘調査は、城郭内を除いて、武家地 23 地点、町地 9 地点、寺社地 5 地点、惣構 1 地点となる（延宝期の地割）。広坂遺跡においても、慶長期以降幕末に至る膨大な遺構や遺物が見つかっている。江戸時代の広坂遺跡については、稿を改めて触れたい。広坂遺跡では、調査区南辺を中心に九谷焼生産関連遺物（窯壁、窯道具、不良品）が出土している。「石川県勧業場」裏銘をもつ染付磁器碗の出土から、明治 5 年（1872）～ 13 年にかけて、隣接する現在の知事公舎地内におかれていた石川県勧業場に関連する遺物と考えられる。明治 22 年には、当地に石川県尋常師範学校がおかれた。以後、平成 7 年に金沢大学附属小中学校が平和町に移転するまで、学校地としての変遷を経た。平成 16 年 10 月には、金沢 21 世紀美術館が完成し、市民に開かれたオープンスペースとして、多くの人が集う場となっている。

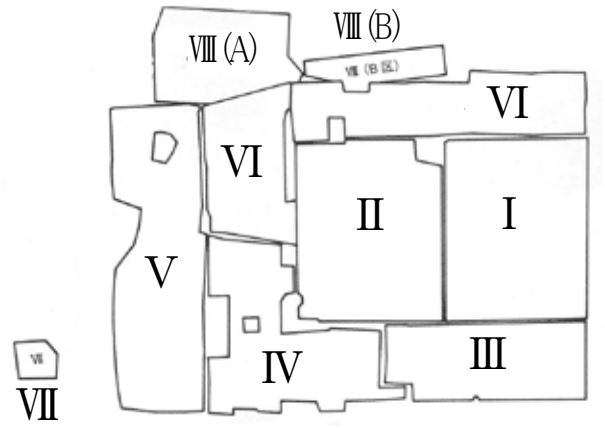


Figure.5　広坂遺跡調査区案内図

鎌倉時代～室町時代後期の広坂遺跡

複数の区画溝が構築されていることから、有力者層の館跡であったと考えられる（Figure.6）。

初期の館の構築時期…13 世紀前半代からの珠洲焼すり鉢 (Figure.25) などがみられるが、遺構には帰属しない。13 世紀中頃～後半代になると、区画溝の脇や区画内の土坑に、中国青磁碗や加賀焼甕が、古代寺院の瓦や礫に混じって廃棄される（Figure.8）。このころから


Figure.6　中世期の主要遺構配置


Figure.7　第Ⅰ調査区の下層遺構


Figure.8　古代瓦と礫が廃棄された土坑

館を造営するための整地と区画溝の整備が行われたと考えられる。13 世紀後半～ 14 世紀前半代以降、遺物量が増大することから、本格的に生活が営まれる場になったことがわかる。

区画溝の変遷…方形区画を呈する区画溝の多くが、真北に対して西に傾く主軸をもっている。いくつかの溝については、13 世紀後半代以降、敷地を拡張する形で造り替えられているように変遷する。あるいは屋敷全体を囲う堀と屋敷内を区切るための区画溝のように、複数の溝が併存していた可能性もある。江戸時代以降の開発により区画溝の大部分が破壊され、遺物が混じり合っているため、多くの区画溝の正確な年代や変遷は判明しなかった。



Figure.9　区画溝（第Ⅰ調査区）



Figure.10　区画溝（第Ⅴ調査区）

屋敷内施設…主軸が真北に対して 17 度西偏する中世的要素が強い礎石建物（Figure.11）と複数の石組方形土坑（Figure.13）を検出した。石組方形土坑の廃絶年代は、出土した陶磁器から 15 世紀後半～ 16 世紀前半代頃と考えられる。また、慶長 15 年（1610）に築造された西外惣構の土居盛土下の層位で、主軸が西偏するＬ字に曲がる柵列（Figure.12）を検出した。



Figure.11　礎石建物（主軸西偏）



Figure.12　柵列



Figure.13　石組方形土坑

墓地…遺跡の南側からは、14 世紀後半～ 15 世紀代の宝篋印塔、宝塔、五輪塔 (Figure14 ～ 16) などが見つかった。量が少なく部材が揃わないことから、屋敷内か近隣における小規模な墓地の形成を想定した。



Figure.14　宝篋印塔笠（凝灰岩製）



Figure.15　宝塔笠（凝灰岩製）



Figure.16　五輪塔火輪（砂岩製）

地鎮遺構…区画溝に掘り込まれたピットから、鉄製銚子鍋（Figure.17）が伏せられた状態で見つかった。その内部には鉄製の半月鎌、刀子、釘が納められていた。鉄製の刃物は悪霊を祓うといわれ、それを鍋で覆うことで土地を鎮める目的があったと考えられる。同じ区画溝からは、やはり伏せられた状態の鉄製の双耳鍋（Figure.18）も見つかった。このような形態の耳がつく鉄鍋は、14 世紀以降現れたとされる。



Figure.17　鉄製銚子鍋（耳位置は推定復元）



Figure.18　鉄製双耳鍋（耳位置は推定復元）

室町時代末期～安土桃山時代－寺内町の屋敷地

金沢御堂が、天文 15 年（1546）にのちの金沢城の地に完成したことから、御堂に近いこの地域は寺内町となったと考えられる。16 世紀後半代の遺構としては、瓦礫集積土坑、および、主軸がほぼ真北を指向する礎石建物（Figure.19）が見つかっている。主軸方向は、17 世紀代の江戸時代の建物と同じだが、16 世紀後半代に埋め戻された土坑上に建てられ、慶長 15 年（1610）から造成される西外惣構土居盛土下に埋没することから、16 世紀後半～ 17 世紀初頭に建っていた建物と考えられる。この段階で、土地利用の主軸方向が西偏からほぼ真北に変化したとみられる。また、この時期の遺物には焼損の痕跡が見られるものがある（Figure.23）。



Figure.19　礎石建物（主軸真北）

江戸時代に伝世した中国陶磁器

18 世紀代３四半期を廃絶の下限とできる土坑内から、龍泉窯系青磁三足盤が出土した。割損していたものの、出土状態で接合後完形の元位置を保っており、伝世し、武家屋敷で床飾りとして使用されていたものであろう。同様に、伝世品と考えられる遺物が複数みつかっており、のこりのよくない中世期の遺構の廃絶年代の推定を困難にする要因となっている。



Figure.20　江戸時代まで伝世し、廃棄された
龍泉窯系青磁三足盤

広坂遺跡の居住者像

金沢市街地域における中世の歴史は、文献資料の少なさから未解明な部分が多い。広坂遺跡が立地する地域は、近世期には石浦荘（いしうらのしょう）域となっていることから、中世では、文献にみられる、林系「石浦」氏の支配域であったと推定される。鎌倉～室町時代後期にかけての区画溝に囲まれた区画割は、石浦氏との関連が疑われる居館跡と考えられ、その盛期を 13 世紀後半～ 14 世紀代におくことができる。室町時代末期～安土桃山時代にかけては、一向衆徒の支配のもと、寺内町としての発展を遂げたものと思われる。遺跡からは、礎石建物や石組を伴う土坑が確認され、貿易陶磁の出土量も多い。特段の宗教的遺構や遺物が認められないことから、寺内町内の有力者層の居住域か、施設であろうか。

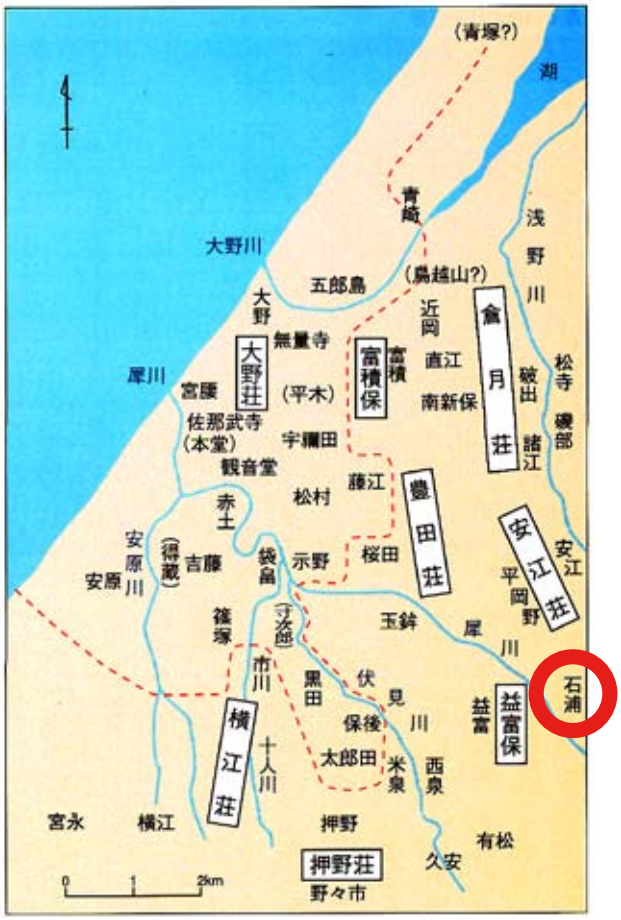


Figure.21　北加賀の中世荘園公領（金沢市史から）

参考文献

五十川伸矢「中世の鍋釜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集 国立歴史民俗博物館
三浦純夫・垣内光次郎 2001「金沢の石造物」『金沢市史資料編２中世二』金沢市
山本信夫ほか 2000『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会
金沢市 1916『稿本金沢市史　市外編第一』
金沢市 2005『金沢市史通史編　原始・古代・中世』



Figure.22　加賀焼甕



Figure.23　加賀焼甕の刻印



Figure.24　珠洲焼甕



Figure.25　珠洲焼すり鉢



Figure.26　珠洲焼すり鉢



Figure.27　越前焼甕（被熱）



Figure.28　古瀬戸灰釉瓶子



Figure.29　古瀬戸鉄釉瓶子



Figure.30　瀬戸天目碗



Figure.31　古瀬戸灰釉卸皿



Figure.32　古瀬戸灰釉碗



Figure.33　瀬戸灰釉皿



Figure.34　青白磁水注



Figure.35　白磁皿（口禿）





Figure.36　白磁皿（枢府手）



Figure.37　白磁碗



Figure.38　青磁碗



Figure.39　青磁碗

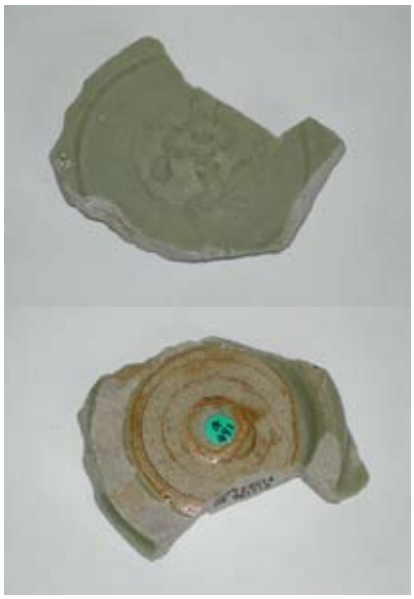


Figure.40　青磁碗



Figure.44　青磁碗



Figure.45　青磁象嵌壺



Figure.41　青磁碗



Figure.42　青磁碗



Figure.43　青磁碗



Figure.46　瑠璃釉小皿



Figure.47　青磁盤



Figure.49　青磁皿



Figure48　青磁盤



Figure.50　青磁皿